〔九條殿遺誡〕貞信公語云、延長八年六月二十六日、霹靂清涼殿之時、侍臣失色、吾心中歸依三寶、殊無所懼、大納言清貫、右中辨希世、尋常不尊佛法、此兩人已當其殃、以是謂之、歸眞之力、尤逃災殃、

〔日本紀略四村上〕天德四年二月十七日丁亥、列見、雷電霹靂於大膳醬院、

應和二年六月十九日乙巳、雷烈鳴一聲、侍臣等申、霹靂右兵衞府邊、樗樹之下有醉臥男、後聞件男已存、

〔百練抄四一條〕正曆四年七月廿日、雷落美福門下、猛火付柱令燒、關白隨身右中將隆家朝臣雜色、避暑於此處、見付打滅了、○又見日本紀略

〔日本紀略十三後一條〕萬壽四年五月廿四日癸亥、雷電風雨、京中洪水流入、舍屋顚倒、豐樂院西第二堂、爲雷火、欲燒、卽以撲消了、雷形如白鷄云々、雷公墮於所々、

〔左經記〕長元元年八月四日丙寅、甚雨、不幾時晴之間、雷一聲、甚以高大也、風傳、大夫史貞行宿禰四條家雷落、打損女房二人云々、但一人則死去、一人被疵未死云々、

〔續世繼四小野の御幸〕ささき○後冷泉后藤原歡子まだおはしましけるをり、ゆふだちのそら、物おそろしく、なる神おどろ〳〵しかりけるに、御經よみてゐさせ給へりけるを、かみおちて、御經なども、かみの所ばかりはやけて、もじはのこり、御身には露のこともおはしまさゞりける、いとたうとく、あさましきこととぞきゝ侍し、○又見古事談十訓抄、共不記年月、

〔中右記〕嘉承二年六月廿一日、今日午後天俄陰雨、脚甚雷電數十度、其聲勝例、天下大驚、申時許、雷落京極殿堂北廊上、火炎高昇、堂舍燒亡、乍驚馳車參京極殿、煙滿東西不可入門、只於法成寺西大門下、相待火滅、北政所御堂、幷南北廊、中門、西大門悉爲煨燼、但佛許奉被取出也、件堂前年泰仲朝臣伊與任間所造營也、莊嚴過差不可記盡、今爲雷火、一日爲煙、哀哉、但餘炎不及他所也、火滅之後、參殿下、暫御枇杷殿也、人々多參入、明日侍從雖可申慶給、依此事延引、入夜退出、後聞、雷落所々多以損人、或所折樹、或